

アイヌ人によるアイヌ語表記への取り組み

中川裕

1 はじめに

アイヌ語話者は日本語話者と少なくとも千年以上の間隣接して生活し、交易・闘争・支配—被支配・混住という形で関わってきた。しかし、アイヌ語と日本語の間にはそれによる語彙や若干の文法事項の借用といった関係は認められるが、文法的な構造には大きな違いがあり、また色々な試みにも関わらず音韻対応の存在が立証されたとは言いがたい。すなわち、日本語とアイヌ語の間には比較言語学的な意味での系統関係は認められていない。他の言語との関係についても同じことが言え、アイヌ語は現在のところ孤立言語 (language isolate) とされるのが一般的である。類型論的に見ても、朝鮮語やトゥングース諸語などのいわゆるアルタイ型の諸言語よりは、日本語からずっと遠い関係にあるといえる。しかしながら、日本という国家の枠組みに全面的に組み込まれてしまったがために、アイヌ語はその表記体系を日本語との関係で築かれなければならなかった。

「アイヌ語に文字はあるのか」とは、よく訊かれる問いである。そのひとつの答えは「アイヌ語は現在ローマ字およびカナをベースにした文字によって疎漏なく表現することが可能であり、それに基くテキストがかなりの量刊行されている」—つまり、「アイヌ語には文字がある」ということになるだろう。

しかし、そうした質問の意図は多くの場合、「アイヌ語には他の言語とは違った固有の・独自の文字があるか」ないし、「アイヌ人はその固有の文字を使って文学作品を作ったり、日常的に手紙のやりとりなどをしたりしているのか？」ということであろう。そのどちらについても、アイヌ人自身が文字に対してどう取り組んできたかということが重要な問題となる。そこで、まずアイヌ語研究者を中心に開発されてきた文字表記について概説した上で、アイヌ人自身が自分たちの言葉をどのように文字化しようとしてきたかについて論じることにする。

2 アイヌ語の音素体系

アイヌ語の音素体系と音節構造は以下の通りである。

母音 : /a,e,i,o,u/

子音 : /p,t,k,c,m,n,s,h,r,y,w,(')/

音節構造 : 北海道方言 (C₁) V (C₂) : C₂ = /p,t,k,m,n,s,r,y,w/

樺太方言 (C₁) V₁ $\left\{ \begin{array}{l} (V_1) \\ (C_2) \end{array} \right\}$: C₂ = /m,n,s,h,y,w/

このうち、/c/は概略日本語のチの子音に当るような音 [tɕ] である。また () に入れた/'/は喉頭破裂音を表しているが、服部一郎編 (1964) の表記では、一音節内で母音の前に他の子音がない場合には、必ずこの/'/が立てられることになっている。したがって、その考え方に立てば、母音始まりの音節は存在しないことになり、音節構造は次のようになる。

音節構造 : 北海道方言 C₁ V (C₂) : C₂ = /p,t,k,m,n,s,r,y,w/

樺太方言 C₁ V₁ $\left\{ \begin{array}{l} (V_1) \\ (C_2) \end{array} \right\}$: C₂ = /m,n,s,h,y,w/

ただし、音的実質としてそのような位置に喉頭破裂音が必ずあるかという点、および、その実質的な有無に関わらずこれを独立した音素として認める必要があるかという点については論争があり、音素として立てる立場と立てない立場がある^{*1}

3 研究者の用いてきた表記法の変遷

現在、アイヌ語の言語学的研究者、あるいはアイヌ語を利用している研究者が用いている表記法はいまだ統一されたものではなく、個人ごとに違うと言ってもよい

^{*1} Refsing(1986:68) では、この点について次のように記している : 'This glottal plosive is treated as a separate consonant phoneme by Hattori, and it is represented as /'/. Asai(1969:772) also recognized this feature, which he allies *seimon heisa* (声門閉鎖, "glottal closure"), but he does not treat it as a separate phoneme. Tamura includes this feature in most of her works, but in the recent *Ainugo kiso goi* (Tamura: 1983) she no longer marks it. In my informant's speech I find the phenomenon hard to detect, and I have left it out of my transcription.'

情況である。表記に使われている文字で区分すれば、ローマ字表記とカナ表記に2分されるが、それぞれにおいても、さらにいくつかのバリエーションがある。

3.1 ローマ字表記^{*2}

①ヘボン式表記

ローマ字表記そのものは、最古のアイヌ語記録と言われている、イタリア人宣教師ジロラモ・デ・アンジェリス (1625)『蝦夷国報告書』にまでさかのぼることができるが、そうした前近代の表記法は別として、現代アイヌ語学の基礎を築いた金田一京助や、金田一出現までのアイヌ語学の権威であったジョン・バチラーなどが用いていた表記法ということで、ヘボン式ローマ字表記が、後述の「音素表記」にとって代わられるまでは最も一般的なアイヌ語表記法であった。

この表記は /-y// -w/ を i, u で、/c-/ を ch で、/s-/ を s で (ただし、/si/ は shi)、/s-/ を sh で表記するのが大きな特徴である。たとえば、久保寺逸彦 (1992)『アイヌ語・日本語辞典稿』から例を引くと次のようになる。

ainu 「人間」、horkeu 「オオカミ」、chish 「泣く」、chisan 「私達が泣く」

金田一および金田一に師事を受けアイヌ民俗学の発展に大いに貢献した久保寺は最後までヘボン式表記法を使い続けた。久保寺と金田一の死後はアイヌ語研究者でヘボン式表記法を用いる人はほとんどいなくなったが、一般の表記としては現在でも使われることがよくある。

②知里真志保の表記

久保寺とともに金田一の薫陶を受けた知里真志保は、当初こそ金田一に従い、彼との共著ということになっている 1936 年の『アイヌ語法概説』においてはヘボン式ローマ字で表記を行っているが、1942 年の『アイヌ語法研究』では、すでに後述の音素表記に近いものを開発しており、/-y// -w/ を j, ũ で、/c-/ を c̣ で、/si/ を si で表記している。また、樺太方言の /-h/ には x を用いている。これらは音素と文字の一対一の対応を目指して設定されたものだと言えるが、/s-/ に s を当てているの

^{*2} 以下、ローマ字表記を扱ったこの 3.1 および 4.2 においては音素表記を / / にいれ、それを表すローマ字表記と区別する。ただし、カナ表記を扱った 3.2 および 4.3 の説明においては、ローマ字は音素表記に対してのみ用いるので、/ / には入れずに示すことにする。

に対し、/s/にはšを当てているのが唯一の例外となっている。上記の例をこの表記法で書き直すと、以下のようになる。

ajnu, horkeŭ, čiš, čisan

後に知里はこの表記法を廃棄し、1950年代の『アイヌ語入門』などの著作においては/-y/-w/を y, w で、/c-/を ch で、/s/を音節頭でも音節末でも s で表記するようになった。すなわち、上記の例を aynu, horkew, chis, chisan と表記するようになった。おそらく、ŭ, ě, šのような補助記号を用いた文字は、印刷の際にかなり負担のかかるものだったために、使用を断念したのだろうと思う。その結果、それぞれの音素の表記は後述の『方言辞典』方式にかなり近くなったが、/c-/を ch で表記したために、一音素一文字の対応はやはり達成されないままになっている。

③音素表記：『方言辞典』方式

1950年代に田村(福田) すす子・服部四郎などの諸論文で確立した表記法。服部編(1964)『アイヌ語方言辞典』によって、この表記法での語形を参照する人が多いと思われるので、仮に『方言辞典』方式と名づけておく。

ここに至って、一音素一文字の原則が確立され、音節頭と音節末で同じと見なされた音素は同じ文字が当てられるようになる。母音始まりの音節を認めず、それまでの表記で母音始まりになる音節の頭には/'/を立てる。/c-/を c で表記する。'uwepeker <'u-'e-pekerのように、「わたり」と見なされる/w/も表記する。樺太方言の/-h/は h で表記する、などの点が特徴である。上記の例をこの表記法で書き直すと次のようになる。

'aynu, horkew, cis, cisan

ただし、これにもさらにバリエーションがあり、/'/を音素として認めるが、表記が煩雑になるため便宜上省略して、aynu, teeta(/te'eta/)のように表記する場合もある。また、人称接辞を名詞や動詞の一部として表記する方式と、独立した語(人称接語)と見なして、切り離して「私達が泣く」を cis an のように表記する方式がある。

④音素表記：『アコロ イタク』方式

北海道ウタリ協会編(1994)『アコロ イタク』で採用されている方式であるので、『アコロ イタク』方式と呼んでおくことにする。

基本的には③と同じだが、/’/を音素として立てない、「わたり」と見なされた y, w は表記しないという点などが③と異なる。すなわち③で'uwepeker と表記していたものは、ここでは uepeker のようになる。また、人称接辞をイコールで区切るという点も③と異なる。上記の例をこの表記法で書き直すと次のようになる。

aynu、horkew、cis、cis=an

現在のところ、この③と④が研究者の間で用いられるローマ字表記として、比較的広範囲に使われているものである。③の表記法をとっていても、便宜上/’/を省略しているために、④に近く見える場合もある。ただし、たとえば「馬」を unma と書くか umma と書くか (発音は同じ) というような点でも書き手によって方針の違いが見られ、厳密に言えば個人ごとに表記が違う状況である。

3.2 カナ表記

アイヌ語カナ表記の歴史は 17 世紀にさかのぼり、江戸時代にアイヌ語の記録を残した、いわゆる蝦夷通辞たちのカナ表記は、現代にまでその影響を及ぼしている。金田一京助や知里真志保なども、その著述においてローマ字に加えてカナ (かな) でもアイヌ語を表記してきた。知里の没後は、しばらくの間アイヌ語研究者は音素表記で記述を行うのがほぼ一般的であったが、カナ表記の需要が増えてくるに伴い、研究者でもローマ字とカナを併用したり、場合によって使い分けたりすることが多くなってきた。ただし、これはローマ字以上に個人差が大きく、統一的な表記法に至っているとはいえないのが現状である。

①金田一京助

まず、アイヌ語学の基礎を築いた金田一京助の表記法を、金田一 (1923) 『アイヌ聖典』によって見てみよう。同書には「神伝」「大伝」「古伝」「神謡」と題される 4 種類の物語が収録されているが、後述のように「大伝」とそれ以外では表記法が異なるので、より整備されたものと考えられる「大伝」の表記について整理してみることにする。

表 1 : 金田一京助のカナ表記法 (1923)

	音節頭	音節末
音素	カナ表記	カナ表記
p	パ行	プ (小)
t	タ行	ツ (小)
k	カ行	ク (小)
c	チャ行	
m	マ行	ム (小)
n	ナ行	ン (大)
s	サ行、シャ行	ス、シ (小)
h	ハ行	
r	ラ行	ラ、リ、ル、レ、ロ (小)
w	ワ行	ウ (大)
y	ヤ行	イ (大)
tu	ツ°	
ye	イエ	
wi	ヰ	
we	ヱ	
wo	ヲ	
-pp-, -tt-, -kk-, -ss-などの-C はそれぞれプ、ツ、ク、シで表わす。		

表中で、「パ行」のように記したのは、pa,pi,pu,pe,po をそれぞれパ、ピ、プ、ペ、ポのように書くということであり、「サ行、シャ行」のように記したのは、たとえば sa を場合によって、サと書いたり、シャと書いたりするということである。ま

た、**ㇿ** (小) などとしたのは、たとえば **kap** 「皮」の **-p** に対して **カㇿ** のように **ㇿ** の小さな文字を当てるということであり、**イ** (大) としたのは、**muɣ** 「箕」の **-y** に対して **ㇿイ** のように他の字と同じ大きさの **イ** を当てるということである。

アイヌ語の破裂音・摩擦音には有声・無声の区別はないので、音素表記では **pe**、**te** のように表記される音も、カナ表記では **べ**、**て** のように書かれることも多い。それを音声の実質に関わらず無声の **ぺ**、**て** などで統一する方式が一般的になってきたのは金田一以降のことである。ただし、金田一も同書の「古伝」という話の中では、**ミンダラ** (**mintar** 「庭」) のような表記を行なっている。

sa,so のような音節は江戸時代の文献では **シャ**、**ショ** のように表記されることが多かったが、金田一は **サ**、**ソ** で表記することが多い。ただし、**ウㇿショロ** (**upsoro** 「ふところ」) のような表記も出てくることがあり、必ずしも統一されているわけではない。

音節末子音を小文字で表記するのは永田方正 (1891) 『北海道蝦夷語地名解』あたりから始まっているようであり、長い伝統を持っている。**-p, -t, -k, -m** をそれぞれ小文字の **ㇿ**、**ㇿ**、**ㇿ**、**ㇿ** で表記するのは永田の頃からほぼ固まっているといつてよいが、**-s** の表記にはゆれがあり、永田は **シュ** を用い、金田一はおおかた **シ** を用いているが、**スクス** (**sukus** 「日光」)、**パスクル** (**paskur** 「カラス」) のように、**ス** を用いている箇所もある。音韻的には **パスクル** と同じ条件の **チエツナシクル** (**cietunaskur** 「速く」) では **ㇿ** が使われており、**ス** と **ㇿ** を使いわける条件は明確ではない。

-r はカナ表記上最も問題になる音である。そもそも **r** が音節末に立つということ自体が、後述のように知里幸恵によって初めて明らかにされたのであり、金田一は『アイヌ聖典』のうちで「大伝」においてのみ、これを **r** + 母音と区別して表記している。そこでは **-r** というひとつの音素に対して小文字の **ㇿ**、**ㇿ**、**ㇿ**、**ㇿ**、**ㇿ** の 5 文字が用いられている。その使い分けは、**コウエカルㇿ** (**kowekarpa** 「そこに集まる」)、**ウエシキㇿ** (**uesikirpa** 「一緒に飛び回る」) のような例外はあるが、大部分は **ㇿ** (**arki** 「来る」)、**ㇿ** (**pirka** 「美しい」)、**ㇿ** (**paskur** 「カラス」)、**ㇿ** (**soyoterke** 「外に飛び出す」)、**ㇿ** (**ikor** 「宝」) のように、直前の母音と同じ母音を持つㇿ行字母が当てられている。

tu、**ye**、**we**、**wi**、**wo** のように、現代の日本語にはない音節の表記も昔から工夫されてきたものである。**tu** を **ㇿ** あるいは **ㇿ** のようにするのは江戸時代の蝦夷通辞によって開発された表記法であり、現在でも **ㇿ** はよく用いられている。

we、**wi**、**wo** はもともとカナとしてそれに当る文字があるので、金田一は **エ**、**ヰ**、**ヲ** のように表記しているが、**ye** はそれに相当するものがないので、**イエ** という二文字

で表わしている。これは後に、色々な形で論議がなされる部分である。

②知里真志保

前述のように、知里真志保は 1942 年の『アイヌ語法研究』において、後の音素表記につながるような大きなローマ字表記の改革を行なった。それと同時にカナ表記についても工夫を行なっている。(次ページ表 2 を参照されたい。)

金田一にかなり共通した表記法ではあるが、ここで重要な点はまず、-s を小文字シ (小) に固定したこと、-h と -r を「直前の母音の音色に従って」小文字で表記することにしたと明記していることである。前述のように金田一でも大筋でそうになっているが、すべてがそれに従っているわけではなく、その時に聞こえた音によって表記しわけているようである。それに対して知里のやり方は一定の語形には一定の表記を与えるという方針だと見てよい。「閉音節の尾音」(現在の考え方では音節末子音) は小文字で示すという点を徹底するため、-w、-y をそれぞれ小文字のウ、ィで表わすことにしたことも合わせて、ここではカナ表記をできるだけ音韻的な表記に近づける努力がなされている。

表 2：知里真志保のカナ表記法（前期）

	音節頭	音節末
音素	カナ表記	カナ表記
p	パ行	プ（小）
t	タ行	ツ（小）
k	カ行	ク（小）
c	チャ行	
m	マ行	ム（小）
n	ナ行	ン（大）
s	サ行	シ（小）
h	ハ行	ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ（小） 直前の母音の音色に従って
r	ラ行	ラ、リ、ル、レ、ロ（小） 直前の母音の音色に従って
w	ワ行	ウ（小）
y	ヤ行	イ（小）
tu	ツ°	
ye	イエ	
wi		
we	エ	
wo	ヲ	
-pp-, -tt-, -kk-, -ss-などの-C はそれぞれプ、ツ、ク、シで表わす。		

その後知里は、1953、54 年の『分類アイヌ語辞典』や 1956 年の『アイヌ語入門』等において、カナ表記をさらに次のように改定した。

表 3：知里真志保のカナ表記法（後期）

	音節頭	音節末
音素	カナ表記	カナ表記
p	パ行	プ (小)
t	タ行	ツ (小)
k	カ行	ク (小)
c	チャ行	
m	マ行	ム (小)
n	ナ行	ン (大)
s	サ行	シ (小)
h	ハ行	ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ (小)
r	ラ行	ル (小)
w	ワ行	ウ (小)
y	ヤ行	イ (小)
tu	ツ°	
ye	イエ	
wi		
we	ウェ	
wo	ウオ	
-pp-, -tt-, -kk-, -ss-などの-C はそれぞれプ、ツ、ク、シ (小) で表わす。		

『アイヌ語法研究』の表記法と特に大きく異なる点は-rの扱いであり、他の音節末子音と同様に、前後にどのような音が来ようとも小文字のルだけで表記することにした。これによって、音素表記にさらに一歩近づいた表記法となっている。ただ

し、樺太方言の-h に関しては、『語法研究』と同じく「直前の母音の音色に従って小さな『ハ』『ヒ』『フ』『ヘ』『ホ』で示」(知里 1953 : 19) している。また、we、wo に旧字体のエ、ヲを当てるのをやめ、ウェ、ウォとしたことは、現在にまでつながるひとつの改革である。

知里はこの他にもアクセントの頂点、すなわち高アクセントが指定されている音節だけをひらがなで、他をカタカナで書くという、画期的な工夫を行なっている。ただし、これはおそらくあまりに面倒なために、他の研究者によっては踏襲されていない。

③ 萩中美枝

知里の表記法に対して批判を行い、改定案を出したのは、夫人であつた萩中美枝である。萩中は 1973 年の「アイヌ語のカナ表記についての試み」という論考において、知里の-r の扱いについて、次のように評している。

知里のときになってから、彼は閉音節を強調するあまり、全部小文字のルにしまった。ピルカ *pirka*(美しい) シル *shir*(地) ウタル *utar*(...たち) と。だが、このカナ表記では、アイヌ語の発音はむりだ。その知里の著書を参考にしたのだろうが、小文字のルを普通文字にして「ピルカ」などという喫茶店ができて、「美しい」という意味だとしてあつた。これには、いっしょにお茶をのみにいった友人のアイヌも、びっくり。

『プヤル *puyar*(窓)』と書いた知里も、「窓」という本を出したいという相談を受けたとき、同じ大きさのかな文字にするのなら『プヤラ』だと言った。

(萩中 1973 : 53)

結論として萩中は「閉音節の r は小文字にして、ひびいた母音をそのまま表記すればよいようだ」とする。ただし、「この場合の r は、多くはすぐ前の母音、稀にはすぐ後の母音をひびかせて、母音があるように聞こえる」ということで、*arki*「来る(複数形)」に対して、アラキ、アリキの両方の表記を認めている。

表 4：萩中美枝 (1973) のカナ表記法

	音節頭	音節末
音素	カナ表記	カナ表記
p	パ行*3	フ (小)
t	タ行	ツ (小)
k	カ行	ク (小)
c	チャ行	
m	マ行	ム (小)
n	ナ行	ン (大)
s	サ行	シ (小)
h	ハ行	
r	ラ行	ラ、リ、ル、レ、ロ (小) ひびいた母音をそのまま
w	ワ行	ウ (大)
y	ヤ行	イ (大)
tu	トゥ	
ye	イェまたは <u>イエ</u>	
wi		
we	ウエまたは <u>ウエ</u>	
wo	ウオまたは <u>ウオ</u>	
-tt-, -kk-などの-C はそれぞれッ、クで表わす*4。		

*3 萩中 (1973) では、p-, t-, k-はすべて清音で表記されているが、札幌テレビ放送 (1978 : 13) では、「カナ表記は発音通り」ということで、濁音表記も認めている。

*4 これについての原則は示されておらず用例から類推したが、-pp-, -ss-の例は挙げられていない。なお、札幌テレビ放送 (1978) では、これらの-CC-の-C はすべて促音ッで表記されている。

-r に関するこのような論議は現在に至るまで続いているのだが、その理由はこの子音が、他の閉鎖音、摩擦音、鼻音と違って、音声学的には明らかに母音を伴って発音されるということにある。知里幸恵が現れるまで、ジョン・パチェラー、金田一京助といったアイヌ語の研究者がことごとく -r と rV の区別に気がつかなかったのもそのことによる。-r に伴われる母音は、rV の母音に比べてやや弱くあいまいであり、ふたつを並べて発音すれば違うことははっきり分かるが、通常の発話速度で文中に現れ比較する音が無い場合には、どちらであるかを判別することが困難なことも少なくない。さらに、韻文中で節をつけて語られる場合には明確な母音を伴うことも多く、強調された発音の場合にも、例えば *pirka* 「美しい」という動詞を用いて「非常に美しい」ということを表現する場合、[piri:ka] のように、明らかに母音 [i] が出現する。

-r をルー文字で表わすという知里の方式は、音素と文字を一対一対応させるという目的にはなかったものであったが、特に -r の前または後ろに i が来る場合には、かなり ri に近い聴覚印象を与えるので、*pirka* の実際の発音を知っている人は、それをピルカと書くのは抵抗が大きく、また、知らない人はどうしても [piruka] のように読んでしまう。ということで、萩中の批判の有無によらず、アイヌ語の発音を直接知っていてあえてこの方式を採用する人は知里以外にはほとんどいなかったと言ってよい。

次に、萩中は *tu* に関して「ツ^もト^もそれだけでは、どう読んでいいのか理解できないだろう」ということでトゥという表記を提案している。萩中以前にトゥという表記が行なわれていなかったかどうかについては明言できないが、この時期あたりからト^等に代わってトゥがよく使われるようになっていったことは確かだと思われる。

萩中のこれらの改変は、知里が音韻論的な表記にできるだけ近づけようとしたのに対し、むしろ日本語を表す際のカナの一般的な表記法に近づけようとしたものと見ることができる。その背景として、萩中は後述する萱野茂の持論だという「ローマ字の読めるアイヌはどれほどいるだろう。アイヌのために、アイヌ語はカタカナで書くべきだ」という言葉を引き、また、旭川市立郷土博物館で『アイヌ語講座』の進行役を務めた体験から、「アイヌ語もだめ、ローマ字ももちろんだめ」というアイヌ女性のために、「アイヌ語のカナ表記法を考えてみる」と述べている。つまり、研究者のためではなく、ローマ字の読み書きのできない(特に年配の、と付け加えておくべきだろう)アイヌ人のためのカナ表記を目指した改変ということになるだろう。

ただし、萩中は「重母音」に関しては日本語の一般的な表記法とは別の方式を考案し、特に ye, we, wo などに対しては「アクセントは、この三種の重母音にかざり、常に後の方に置かれる。とすれば、イエと後の母音を小さく書くよりイエまたは イエ とした方がよさそうである」としている*5。

④青本

前述のように、知里の死後しばらくの間は、少なくともアイヌ語の専門家はカナ表記を用いず、もっぱら『方言辞典』方式の音素表記が主流であった。カナは非専門家の用いる不正確な表記法であり、一般向けのものも含めてローマ字で表記を行うべきであるというような考え方は、現在まで根強く残っている*6。それにも関わらず、萩中が「カナ表記の原則」を表した 1970 年代の半ばあたりから、おもにアイヌ無形文化伝承保存会や北海道教育委員会といった北海道の諸機関の刊行物を中心に、アイヌ語のテキストをローマ字とカタカナの二重表記で表示することが一般的になってくる。

そのひとつとして、1981 年から 97 年まで刊行された『アイヌ民俗文化財調査報告』シリーズが挙げられる(俗に「青本」と呼ばれているので、以下それで略称する)。81 年の『アイヌ民俗調査 I』の表記法は次のようになっている。

*5 これはさすがに印刷の際に煩雑な方式だったと見え、萩中が全面的にテキストの執筆を手がけた札幌テレビ放送(1978)『サコロベの世界』では、「これらの重母音は、アクセントが後の方に置かれる。したがって、私は、前のほうの母音も小さい文字にして表した」(12)として、「ハッエ hawe(その声)」「パィエ paye(行く)」などの例を挙げている。

*6 筆者が 1995 年に『アイヌ語千歳方言辞典』をカナ表記主体のアイウエオ順配列で刊行した時にも、このような意見が周囲から聞こえてきた。

表 5 : 青本のカナ表記法 (81 年版)

	音節頭	音節末
音素	カナ表記	カナ表記
p	パ行、バ行	プ (小)
t	タ行、ダ行	ツ (小)
k	カ行、ガ行	ク (小)
c	チャ行、ただし cu に対してツも。	
m	マ行	ム (小)
n	ナ行	ン (大)
s	サ行	シ (小)
h	ハ行	
r	ラ行	ラ、リ、ル、レ、ロ (小)
w	ワ行	ウ (小)
y	ヤ行	イ (小)
tu	トゥ	
ye	イエ	
wi		
we	ウェ	
wo	ウオ	
-pp-, -tt-, -kk-, -ss-などの-C はそれぞれプ、ツ、ク、シで表わす。		

-w、-y が小文字ウ、イで表記される点では知里真志保に準じているともいえるが、p、t、kについて、凡例で「アイヌ語では、アルファベットの p, t, k に清濁

(無声と有声)の区別がないが、実際の発音では表われるので、これを片仮名で表わす」としたり、凡例には無いが、cu をチュで書いたりツで書いたりしているのは*7、知里とは逆に発音表記としての側面を強く出したものとも言える。

-r は小文字のラ行字母で表記し、81 年度の凡例では「先行母音の音 (たとえば、kor の o) が、r の後に響く」のように書かれているが、巻を追うごとに少しずつ変わって行き、83 年度『III』では、すべて小文字のルで表わされる。つまり、知里の『アイヌ語入門』方式になる。85 年度『V』では一部例外があるが、また元に戻り、86 年度からは凡例に「kor コロ、ないしコル、kar カラ、ないしカル、cir チリ、ないしチル」のように書かれるようになって、聞こえた音に合わせて書くという方針になる。

このシリーズは巻ごとに異なった地域の聞き取り調査を行っており、上記のような表記の変化は、話者の発音の違いを反映しているのかも知れないが、カナ表記の機能として発音の表示ということを重視していることは間違いない。

⑤ 緑本

アイヌ無形文化伝承保存会が 1981 年から『神々の物語』を第一輯として刊行を始めた「アイヌ無形民俗文化財記録シリーズ」は、おもに口承文芸の録音資料の文字化を試みたものだが、これもまたローマ字とカナの二重表記を採用している。ただし、その表記の方式については、「あとがき」に「アイヌ語の表記に関しても原則的な統一は計ったが、細部については各執筆者の裁量におまかせした」とあるのみで、原則は表示されていない。『神々の物語』のテキストを実際に見てみると、大筋は知里方式に従いながら、萩中方式と同じく tu にはトゥを当て、-r についてはラ行音の小文字を「ひびいた母音」によって書き分けるという方式で書いている人が多い。ただし、人によっては pet 「川」をペツではなくペトと表記したり、pe 「も」をべと表記したりする例が見られる。さらに号を重ねるに従って様々な表記法が用いられ、ト°も用いられるようになってくる。

*7 これは 86 年度から凡例に明記されるようになる。

そのシリーズを受け継ぐ形で 1988 年から北海道教育委員会が刊行を始めた「アイヌ無形民俗文化財記録刊行」シリーズ (俗に「緑本」と呼ばれているので、以下それで略称する) では、凡例で 4 ページにわたって、ローマ字とカナについての表記の原則を述べている。その基本方針となっているのは次のようなことである。

1. カナ表記は、それをそのまま読めば、もとの発音に近いものが再現できることを目標とする。
2. カナ表記は、誰もが学びやすいことを第一とする。そのためには、特殊な表記法を作らなければ表現できない場合を除き、日本語ないし外来語をカナ表記する際の通常の表記法から外れないようにする。
3. ローマ字表記は、単語や形態素の切れ目を明確に表わし、それに従って辞書が引けるようにすることを目標とする。したがって、実際の発音において省略されたり、音の交替 (別の音に変わること) を起こしている場合でも、元の形 (単独で丁寧に発音された形) に直して表記する。

その原則の下に、実際の文字は次のように割り当てられている。

表 6：緑本のカナ表記法

	音節頭	音節末
音素	カナ表記	カナ表記
p	パ行	ッ (小)
t	タ行	ッ (小)
k	カ行	ク (小)
c	チャ行	
m	マ行	ム (小)、ただし p,m の前では ン (大)
n	ナ行	ン (大)
s	サ行	ス、シ (小) 聞こえた音によって
h	ハ行	
r	ラ行	ラ、リ、ル、レ、ロ (小) 聞こえた音によって
w	ワ行	ウ (大)
y	ヤ行	イ (大)
tu	トウ	
ye	イエ	
wi	ウィ	
we	ウェ	
wo	ウオ	
-pp-, -tt-, -kk-, -ss-などの-C はッ (小) で表わす。		

この表だけ見れば、子音の表記は金田一に準じ、wi,we,woなどは知里に、tuは萩中に準じた折衷的な表記と言えるかも知れない。しかし、実は緑本の表記がこれまでと大きく違うのは、次のような語中の-pp-, -tt-, -kk-, -ss- 等の子音連続の表記に関する部分である。

	hoppa 「残す」	sattek 「痩せている」	rakko 「ラッコ」	assap 「櫂」
従前の方式	ホッパ	サッテク	ラッコ	アシサッ
緑本	ホッパ	サッテク	ラッコ	アッサッ

それまでのカナ表記の主流は、-p にはッ、-t にはッ、-k にはッを割り当て、-pp- のような重子音になった場合でも、-p はッのままに表示するというやり方であり、音素との一対一対応という観点から見て理にかなった方式をとっていた。しかし、緑本ではあえてそれを廃し、-pp-, -kk- のように同一子音が重複した場合には、日本語の促音の表記と同様に扱って、すべてッで表すことにした。その理由について同書の「カナ表記の原則」では次のように書かれている。

語末の-p,-t,-k はカプ kap 「皮」、サク sak 「夏」のように、小さなッ、ッ、ッで表します。ただし、makke 「開ける」や、cippo 「小舟」の kk や pp のように、同じ音が続いた場合は、マッケ、チッポのように表記し、マッケ、チッポのようにには表記しません。これは、マッケという表記で makke を完全に表せるのに、わざわざ読みにくい特殊な表記を持ち込む必要はないという理由からです。

もっともこれですと、matkosanu 「ぱっと飛び起きる」と makkosanu 「ぱっとひらける」がマッコサヌという同じ表記になってしまい区別できなくなってしまうのですが、それによって生じる問題は、頻度の点からいって、シンヌラッパ「先祖供養」をシンヌラッパなどと書かなければならなくなるという不便さよりは、ずっと小さいと思われます。(北海道教育委員会 1988 : 6)

どちらが「不便」かということに関しては異論も多いが、この方式の背景にあるのは、上記の「カナ表記は、誰もが学びやすいことを第一とする。そのためには、特殊な表記法を作らなければ表現できない場合を除き、日本語ないし外来語をカナ

表記する際の通常の表記法から外れないようにする」という、萩中を除いてはそれまで意図されてこなかった基本方針である。

同じ原則によって、萩中の提案した *tu* に対する *トゥ* の表記は、英語の表記などですでに日本語において定着しているという理由で取り込まれたが、*ye* や *we* 等について萩中が提案した イエ または ウエ などという方式については、似たような発音の外来語の表記に際して、*イエ*、*ウエ* が一般化しつつあるという認識のもとに採用されなかった。

この緑本の表記法には筆者自身が深く関わっているのも、その成立の過程について言えば、これは上記の基本方針から演繹的に出てきたものではなく、後述する萱野茂 (1974) 『ウエペケレ集大成』などの表記法をモデルとしてできてきたものである。いわばアイヌ人自身の用いている既存の表記法を整理したもののだといつてよい。この点については 4.3 の④で再び取り上げる。

3.3 まとめ

本稿の焦点は次節で述べるアイヌ人自身の表記への取り組みにあるので、ここではひとまずこれらのものを代表例として挙げるにとどめ、これ以上詳しく説明しないことにするが、カナ表記にはこれ以外の方式もちろん採用されている。たとえば、田村すず子編 (2001-2003) 『アイヌ語沙流方言の音声資料』では、青本よりもさらに細かい表記上の区別を行い、発音をより厳密に表記しようとしている*8。さらに研究者個々人の表記法になるとひとりひとり違うといつてよい状況にある。

このように研究者のカナ表記法が人によって大きく異なるのは、カナ表記に担わせようとする機能についての考え方が違うことによると考えられる。それはおもに次の三つにまとめられるだろう。

- A. 音素表記との対応の重視。
- B. 発音の正確な表記の重視。
- C. 日本語のカナ表記法との折り合いの重視。

実際には、この三つのうちのどれかひとつだけを特化して、他を切り捨てた表記法と言うのは無く、どこに重心を置いているかの違いになる。

8 また同書では、-pp-*、*-tt-*、*-kk-*などの場合には緑本と同じく促音のッを用いるが、それ以外の条件下にある *-t* に対しては小文字のトを割り当てて、*-tt-* と *-tk-* などが同一表記になるのをふせいでいる。

金田一の表記法は、A～Cのどれに特に重点があるともいえない表記法だが、知里真志保はAに向かってそれを改良していった。しかし、最終的には完全に一文字を一音素に対応させるような表記法には到達しなかった。その後、Bに重点をおいた表記法の追求が色々な形で行なわれるようになるが、それにプラスしてCに重点が置かれた表記法が、萩中や緑本の表記法として展開し、様々なバリエーションを作り上げているというのが、研究者の表記法の現状だといってよかろう。

しかし、研究者のカナ表記法のバラエティというのは、音節末子音は小文字で表すとか、できるだけすでにある文字を使って表すといったような点では概ね一致しており、その違いの幅はそれほど大きくない。この点ではアイヌ語話者自身のカナ表記のほうが、もっと激しい違いを見せるのである。それについては、4.3 で述べることにする。

4 アイヌ人自身によるアイヌ語の表記

4.1 キリル文字による表記

アイヌ人自身が自らアイヌ語を書いた最初のテキストとしては、後述の知里幸恵(1923)『アイヌ神謡集』を挙げるのが一般的であり、公刊されたものとしてはそれが最初のものとして認められるが、それ以前に私信としてキリル文字で書かれたものがあることが、近年明らかになった。樺太出身の千徳太郎治(1872-1929)による、プロニスワフ・ピウスツキ宛の書簡がそれである。同書簡は1906年付けで3通あり、ロシア・ユジノサハリンスク州立博物館に所蔵されている。これらは同博物館館長のヴラジスラフ・ラティシェフ氏の委託を受けて、荻原真子、丹菊逸治、山下宗久、山下オクサーナの共同作業で翻刻・解説・露訳され、『プロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所紀要』4号に掲載された^{*9}。また翌年同じく荻原・丹菊によって和文との対訳が刊行された^{*10}。

4.2 ローマ字による表記

アイヌ人自身の手による初のアイヌ語テキスト集とされる知里幸恵(1903-1922)の『アイヌ神謡集』(1923)は、ヘボン式ローマ字でアイヌ語が表記されている。しかし、彼女の表記法は金田一やバチエラーの表記を引き写したものではない。知里幸恵は金田一京助にローマ字表記でアイヌ語を記録するように勧められるまで、ローマ字を習ったことがなかったということが、金田一への私信によって知られて

^{*9} Сэнтоку(2000:89-97)

^{*10} 荻原真子解説、丹菊逸治翻刻・訳注(2001:190-221)

いるが*¹¹、彼女は単に金田一やバチェラーの表記法を引き写すことなく、独自の、しかもより正確な表記法を作り出した。それは、特に/-r/の表記に現れている。というよりもむしろ、金田一京助をはじめとする当時の研究者は、/-r/と、/rV/という独立した音節の区別を認識しておらず、すべて/rV/で表記していたのであり、その区別を初めて指摘したのが知里幸恵だったのである。

知里幸恵はこの『アイヌ神謡集』の最終校正を終えた直後の1922年9月、寄宿していた金田一京助宅で病死しており、その1年後の1923年8月に同書が刊行されているが、興味深いことに同じ1923年の1月に刊行された金田一の『アイヌ聖典』では、一冊の本の中で、/-r/に関してふたつの異なる表記法がとられている。すなわち「古伝」「神伝」「神謡」と名づけられたテキスト群では、それ以前の金田一の表記法と同じく、/-r/に当るものはすべてr + 母音で表記されているのだが、「大伝」と称されるテキストでは/-r/と/rV/が区別されているのである。

Pase kamui,	大神！
itakan chiki	わが申さく を
pirika inu	よく 聞こし
eki nankan na!	給ふ べし。
Ainurakkuru	アイヌラックル
ane wa tapne;	こそ我にてあれ。
Anan awa	然る ところ
akoro kotan	わが 郷
kemush wa	飢渴あり て

『アイヌ聖典』(古伝：152-153)

*¹¹ 知里幸恵(1984：49) 金田一京助宛大正9年6月24日付け書簡。

Inkar kusu	いでや
Ainurakkur	アイヌラックル
Oina kamui	オイナ カムイ
ene hike,	にて汝はある に、
eneturpakno	かくまで
eshiknaki he?	汝は知らずに居る や。

同 (大伝 : 108)

同一人物を表す Ainurakkuru と Ainurakkur という表記を比べれば一目瞭然だが、このように一冊の本の中で表記が異なっている。知里幸恵の亡くなった 9 月と『アイヌ聖典』が刊行された翌年 1 月という時間関係を考えると、この「大伝」だけは知里幸恵が生前に監修を行なっていたが、「古伝」「神伝」等は間に合わず、元の金田一の表記のまま刊行されたという可能性も考えてみることができる。

ヘボン式表記の伝統は、知里幸恵の死後、叔母である金成マツ (1875-1961) に引き継がれる。金成マツも、金田一京助にアイヌ語の知識を提供するため金田一家に寄宿していたが、金田一が多忙だったため、自らノートに自分の伝承している英雄叙事詩 (ユカラ) 等を書きつけはじめる。金成マツが明治 8 年生まれ的女性という環境にも関わらずローマ字を使いこなせたのは、英国聖光会の伝道師であるジョン・パチェラーが函館に設立した愛隣学校の卒業生であり、そこで英語の教育も受けていたからである。知里真志保は金成マツの死去にあたって北海道新聞に寄せた一文の中で、「私の幼少時代おば【金成マツ】と母【知里ナミ】の間にかわされる手紙やはがきはすべてローマ字であった」*12 と、述べている。

金成マツの書き上げたノートのうち、聖伝、英雄叙事詩のテキストは金田一の訳注をつけて 1959 年から『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』(三省堂)として刊行され、同テキスト集の 7 巻までを占めた (『ユーカラ集』自体は 9 巻まで刊行された)。金田一没後、そのノートは萱野茂に委託され、彼の手で引き続きその英雄叙事詩のテキストが訳出、刊行されて現在にいたっている*13。

このヘボン式ローマ字表記の伝統からいち早く抜け出したのは、知里幸恵の弟で

*12 「おば金成マツのこと」『北海道新聞』1961 年 4 月 9 日朝刊 : 知里真志保 (1986) 所収

*13 北海道教育委員会 (1979-) アイヌ民俗文化財 ユーカラシリーズ

あり、金田一京助の弟子であった知里真志保であった。彼はローマ字表記に関してもカナ表記に関しても、前述のように音素表記を目指した表記法を創出した。ただし、彼自身はアイヌ語の母語話者ではなく、アイヌ語に対するスタンスとしても研究者に位置づけるべき人物であり、別扱いにすべきだと思われる。

その後、鍋沢元蔵や貫塩喜蔵といった人たちが、ローマ字表記でテキストを出版する。鍋沢は後述の『アイヌ・モシリ』という同人誌にテキストを多数投稿しており、また、個人でもガリ版刷りの祈詞集を出しているが、それらはすべてカナで書かれている。一方、1965年から69年にかけて、門別町郷土史研究会から『アイヌ叙事詩 クトネシリカ』『アイヌの祈詞』『アイヌの叙事詩』というテキスト集を立て続けに刊行する(鍋沢自身は67年に没している)。これらのテキストはすべてローマ字表記で書かれているが、本来カナ書きで書かれていたものを扇谷昌康(氏名は明示はされていない)がローマ字表記に書き改めたものであることが、凡例に記されている。また、このローマ字表記法はヘボン式ではなく、知里真志保の『アイヌ語入門』を参考したものであることもまた明記されている。

その後1978年に貫塩喜蔵が『アイヌ叙事詩 サコロペ』を白糠町から刊行した。これは貫塩の母キシの語った sakorpe「英雄叙事詩」を、貫塩が書き起こし和訳したものが元になっている。貫塩はそのテキストをローマ字とカナの両方で表記しており、自叙で貫塩は「(録音を)私がローマ字で書き表わし、和訳した。アイヌ語は日本語では表現しにくい部分がたくさんあって、むしろ、ローマ字で綴れば発音がぐんと近づいてくる」と述べており、カナ表記よりもローマ字のほうを中心に考えていた節がある。同書に写真で掲載されている原稿を見ると、代書業を経て村会議員になったという氏の経歴を示すように、非常に端正な書体で書かれている。

凡例によると、貫塩の表記はそのまま活字化されたのではなく、編者の松本成美、畠山重義が貫塩との協議の上で、「開拓記念館方式」というものによって整理した旨書かれている。この方式は「故知里真志保博士のものを基礎に、問題点の若干に改良を試みて製作した」とされており、ローマ字表記に関してはほぼ『アイヌ語入門』に準じたものだと言ってよい。

少なくとも母語話者によるアイヌ語のローマ字表記というのは、このあたりまでと言ってよいのではなかろうか。これ以降は、むしろアイヌ人自身の著作物としてはカナ表記が中心になっていく。

4.3 カナによる表記

アイヌ語のカナ表記もまた古い歴史を持ち、17世紀初頭の『松前の言』(著者

未詳)にまで遡る。しかし、アイヌ人自身がカナ表記を用いて書いた文章となると、意外に後代にいたるまで出てこない。金田一京助が樺太アイヌ人山辺安之助にその半生を口述させた『あいぬ物語』では、日本語の訳文にカナでアイヌ語の文章をルビのようにして振るという離れ業を行っているが、これは山辺自身の表記ではない。

プライベートな場ではカナで手紙や日記などが書かれていたかもしれないことは充分に考えられるが、公刊されたもので母語話者が自分の言葉を表記したものということになる。パチェラー八重子(1931)『若き同族に』^{ウタリ}所収の短歌「ウタシパノ ウコイキプウタリ レンカプアニ アイヌピリカプ モシリアエケシケ」あたりが、最も初期の例かも知れない。

①山本多助・鍋沢元蔵

知里真志保を別として、早い時期からカナ表記でテキストを表していたのは山本多助(1904-1993)、鍋沢元蔵といった人たちである。数多くの著述で知られ、後年アイヌ人自身で組織されたアイヌ文化研究団体であるヤエユーカラ民族学会の初代名誉会長ともなった山本は、1957年頃から鍋沢らと語らい、アイヌ語同人誌『アイヌ・モシリ』(1957-1965)を刊行した。これは発行部数わずか32部という冊子で、長らくその全貌は一般に知られないままだったが、1998年に釧路アイヌ文化懇話会の尽力によって復刻された。今見ると、その運動がもっと広く展開されていたら、アイヌ語の書き言葉の歴史自体が大きく変わっていたかもしれないという感想を抱かせる。

同誌第9号に掲げられた編集の方針は、次のような非常に志の高いものであった。

- 「アイヌ・モシリ」はアイヌ語の保存、保護、発展を目的とする。
- 「アイヌ・モシリ」はアイヌ族にのみ無料頒布する。
- 「アイヌ・モシリ」はアイヌ語原文に限る。
- 「アイヌ・モシリ」の寄稿、執筆者はアイヌ族に限る。
- 「アイヌ・モシリ」はアイヌ族の古典ユーカラ、ウヤシカマ、ウパスクマ、ウエペケレ、オイナ、ヤイサマ、ウポポ、カムイ・ノミ等から外国文学のほんやく、観光、作文、紀行、コタン通信等に及ぶ一切をアイヌ・イタク原文で歓迎する。

(釧路アイヌ文化懇話会 1998: 220)

そうした目標に合わせ、同誌には山本自身による聞き取りのテキストや、鍋沢元蔵の英雄叙事詩のテキストが、カナ表記で掲載されていた。山本の表記法と鍋沢の表記法は明らかに違うものであったが、その一番大きな点は山本自身が考案した「アイヌ文字」という、カタカナをベースにした独自の文字である。これはチャ、チュ、チェ、チョ、シャ、シュ、シェ、ショ、トゥ、イエ、ウエ、ウォなどのように日本語のカナ表記体系では一音節が2文字で表記されてしまうことになる音節について、それを表す文字を考案したものである(資料1参照)。

wi, we, wo については、すでに金田一がもともとカナ表記にあるヰ、ヱ、ヲを用いていたし、tu に関しても他の音節と同様一文字で表記すべきであるという主張から、ト°、ツ°を支持する人は多い。そのようなことから山本の意図したところは明瞭に理解できるが、結局のところ、彼の表記法は日本語のカナ表記の慣習から大きく外れており、覚えること自体が労力を要するものであるため、他の人がそれを採用するには至らなかったようである。なお、山本自身この文字に固執していたわけではなく、1991年に刊行した『イタッ カシカムイ』では、ト°、ヲ、エなどは用いているが、それ以外に特別な作字は行っていない。

『アイヌ・モシリ』の重要な投稿者であった鍋沢元蔵(1886-1967)は、前述のように扇谷昌康との共著で、門別町郷土史研究会から自分の伝承する英雄叙事詩や祈詞を数冊刊行している。同研究会の刊行物はローマ字表記だが、『アイヌ・モシリ』への投稿原稿はすべてカナ表記であり、これが彼本来の表記法であったと考えられる。この表記は山本のともまた違い、彼の「アイヌ文字」は利用しない代わりに、ca をザ、ce をぜのように表記する(この表記自体は江戸時代からある)。tu はツ°で書いたりト°で書いたりしている。さらに特徴的なのはエ°という表記で、ruwe 「こと」をルエ°、moymoye 「動かす」をモイモエ°で表記しているところを見ると、we, ye の音節を表しているようにも見えるが、wen 「悪い」をウエン、tuye 「切る」をト°イエ°とも書いているので、エの前に何か「わたり」の要素が感じられる場合に、エ°と表しているというところだろう。

『アイヌ・モシリ』の表記で山本・鍋沢の両者に共通している点は、p-, t-, k- について、清音も濁音も両方用いていること、-p, -t, -k, -s, -m に対しては小文字による表記を行なっているが、-r は大文字で書かれており、rV との区別がないこと。一方で、-pp-, -kk-などはチカッポ(cikappo 「小鳥」)、ワッカ(wakka 「水」)のように書き、チカッポ、ワッカのような促音表記をしていないことなどが挙げられる。ただし、この点も前述の『イタッ カシカムイ』では大分変わっており、濁音の表記は影をひそめ、wakka はワッカのように表記されている。

②砂沢クラ

旭川の砂沢クラ (1897-1990) は知里幸恵とも親交のあった人だが、1967年に北海道大学教授の池上二良の勧めによって自叙伝をノートに書きためたものが、1983年に『私の一代の思い出 クスクップ オルシベ』として、カナ表記原文、日本語訳、挿絵ともすべて自筆で刊行された。この本の表記法については、同書中で切替英雄が詳しく説明している他、切替 (1997) でも触れられているが、-p, -t, -k, -sについては、ahup「入る」をアフップ*¹⁴、kurmat「和人の女」をクルマツツ°、Yupet「湧別 (地名)」をユーベツツ、itak「話す」をイタツクあるいはイタツク、-as「私たちが (人称接辞)」はアシ、アッシあるいはアッスなどのように、さまざまな書き方で書く。また、caをザ、cuをツ、ヅ、ツ°、ceをゼと書く、tuをヅ、ツ°、あるいはその部分だけローマ字を使って tu と書くなどの点が特徴である。(Figure 2 参照)

ca, cu, ce などに対して砂沢がチャ、チュ、チェなどの表記を用いない理由として、切替 (1997) は、「口蓋化、非口蓋化の対立がないことがその理由であったと想像される」(101) としているが、前述の山本、鍋沢、後述の葛野もこうした拗音の表記を用いていないところを見ると、これはアイヌ語母語話者の共通した感覚なのではなかろうかとも考えられる。だとすると、金田一がこれらをチャ、チュ、チェなどで表記し始めた時点から、すでに母語話者の感覚とは乖離したものになっていた可能性もあることになる。

③葛野辰次郎

日高静内町東別の葛野辰次郎 (1910-2002) は、1978年から『キムスポ』という私家版の冊子を発行し始めた。これはやはり彼がアイヌ語を後世に残そうということで始めたもので、伝承文学や祈詞に加え、彼自身の雑感のようなものも含めてカナ表記で書き表したものである。彼の表記の特徴は、日本語で日常的に使われる文字だけでほぼすべて表そうとしていることである。tu はツと表記し、ツやエ、ヤ、ユなどを除く小文字は一切使わず、-t, -k は多くの場合ッで表すが、-p は唇の閉鎖音であることをウッやイツという形で表現している。例えば reyep「犬」はレエウッ、nep「何」はネウッ、kip「すること」はキイツのように表す。ちなみに cup「月」はツウッのように表している。葛野は-pを表すのに小文字のッを用いる表記法があることを知らないのではない。それでは正しい音が表せないということで、自ら考え出した表記法を用いているのである。たしかに、-pの正しい発音は両唇をつぐ

*¹⁴ 不思議なことに、sukup「成長する」という単語は、本文中ではすべてスクップと表記されているのに、書名のみスクップと、プが小文字になっている。

むだけで息を解放しないので、プで表される音とは聞いた聞いた感じがまったく異なる。両唇を閉じるのだということを表すために、ウという唇を使う母音の後に、閉鎖を表すッをつけてこの音を表すというのは合理的だといえる。しかし、-t と -k が区別できないことと、なにより -p を表すのに *ㇿ* の小文字を使うという方式は当時すでにかなり定着していたので、この表記法も一般に広まるにはいたらなかった。

なお、葛野もまた *ye, we, ce, cu* などを表すのに *イェ、ウエ、チェ、チュ* などの表記はほとんど使わず、*ye, we* にはともにエを、*ce* にはゼを *cu* にはツを当てたりしているが、その一方で *icaniw* 「マス」に対して *イチャニユ* という表記も行っており、必ずしも開音節 1 文字を徹底しているわけではない。(資料 3 参照)

④ 萱野茂

日高沙流郡平取町二風谷の萱野茂 (1926-) は、1950 年代からアイヌ文化に関わる様々な活動に従事し始めた。萱野が記録したアイヌ語テキストの最初の公刊物は、1963 年『アイヌ文化』2 号に掲載した「*クルコトナシのこのウエボタラ*」(24-29) ではないかと思われる。この時点から萱野はカナ表記を主体にして著述を行なっている。萱野の初期の代表的な業績は 1974 年の『ウエペケレ集大成』(アルドオ) だが、同書の「はじめに」で、彼は次のように述べている。

今度は、自分が「ウエペケレ」の本を出すにあたって、アイヌとして、いちばん考えたことは、金田一先生をはじめ、今迄の先生方の書いてくれた多くの研究書は、これがカタカナで書いてあってくれば、わたしも含めてアイヌ達が、どんなに自分の国の言葉として、自分の手元に引き寄せることが出来るのに、わずかでもアイヌが読める本を作りたい。それが夢だったわけです。(萱野 1974 : 1)

この「自分の国の言葉として」という表現を、当時の萱野がどういう考えで用いたかは不明だが、少なくとも当時のアイヌ人がアイヌ語を理解するためには、ローマ字ではなく彼らが日常的に用いているカナで表記しなければならないという、前述の萩中 (1973) で言及されている主張を、ここで行っていることは言うまでもない。同じく、本書の編集者であった斉藤敦の「萱野茂本『ウエペケレ』編集にあたって」では、次のように書かれている。

この本は、アイヌ語こそおのれの母国語であると認識した萱野さんが、同じ血をうけついでいても生まれながらにして、あるいは遠い幼時の思い出の中でしかアイヌ語になじみの無い、多くのアイヌの同胞に対して、遠い祖先から次々と受けつがれた遺産をかたみ分けしたい、北海道の自然に生きた祖先が子孫へ語りついで知恵と心を受けとめて欲しいと切望したところからはじまる。アイヌ語で語られたこれらの物語を、研究用としてだけでなく、多くのアイヌ民族の血を引く人達及び不特定多数の日本語を読む人達に読んでもらいたいという必然から、語られたウエペケレを筆録するのに、ローマ字と比較して音韻上の色々な欠点がある事は承知の上で、カタカナによる表記法を執った。(萱野 1974 : 7)

ここでも萱野と同様の主張が行われているが、その一方でローマ字表記に対してカナ表記に「音韻上の色々な欠点がある事は承知の上で」と、カナ表記を使用することの弁明を行っている。カナはアイヌ語を記述するには不完全な文字であるというのは、研究者によって培われてきた観念であり、それは現在でも連綿として存在しているが、言語学者である知里真志保が最後までカナ表記法と格闘していたことを考えれば、このような考え方はやはり和人側からの視点に立つものであり、萱野の主張とは同じようであると言わざるを得ない^{*15}。

前述のように貫塩喜蔵が発音の正確な表記のためということでローマ字表記を用いることを主張したのに対し、萱野は「アイヌ達が」「自分の手元に引き寄せる」ためには、カナ表記でなければならないとしたわけであるが、この萱野の主張はその後一貫して続けられ、大きな影響を与えている。前述のようにこの時期あたりから北海道でカナとローマ字の二重表記で出版される刊行物が多くなっているのも、萱野のこの主張と無関係ではないであろうと筆者は考える。

^{*15} 2005 年刊行の新訂復刻版では、他の序文とともに、この「はじめに」も「編集にあたって」も全文削除されている。

表 7 : 萱野茂のカナ表記法 (1974 年版『ウエペケレ集大成』)

	音節頭	音節末
音素	カナ表記	カナ表記
p	パ行	ㇰ (小)
t	タ行	ㇱ (小)
k	カ行	ㇰ (小) : ッで表記されていることも多い
c	チャ行	
m	マ行	ム (大または小)
n	ナ行	ン (大)
s	サ行	シ (大または小)
h	ハ行	
r	ラ行	ラ、リ、ル、レ、ロ (大部分は大、一部小) 前音節の母音に従って
w	ワ行	ウ (大)
y	ヤ行	イ (大)
tu	トウ	
ye	イエ	
wi		
we	ウエ	
wo	ウオ	
-pp-, -tt-, -kk-, -ss-などの-C はㇰ (小) で表わす。		

この表記法は1976年の『チセ・ア・カラ』、1979年の『ひとつぶのサッチポロ』でも踏襲されており、1988年の『カムイユカラと昔話』でも、-rを小文字ラ行字母で書く率が増えてくることなどを除いては、基本的に同じである。-kがッとツの両方で書かれたり、-s,-m,-rなどで文字の大小に揺れが見られたりするが、これは音の認定の問題であって、表記法のシステムとは直接関係が無い。そのような個別的な適用の問題を除外すると、この表記法は-pp-等の-Cを促音のッで表すことなどを含めて、前述の緑本の表記法に非常に近い。(資料4参照)

言うまでもなく、時間的な順序から言えば緑本のほうがこの表記法に近いものを採用しているのである。それは、前述のように緑本の基本方針のひとつが「カナ表記は、誰もが学びやすいことを第一とする」ということであり、そのモデルを『ウエペケレ集大成』等の萱野の表記に求めたからに他ならない。

逆に言えば、緑本が『ウエペケレ集大成』等の表記を取り入れることができたのは、この表記法が、山本、鍋沢、砂沢、葛野といった他のアイヌ語話者の表記に比べて、研究者の開発してきた表記法にずっと近かったからであったとも言える。その理由は、おそらく萱野が金田一京助、山田秀三、萩中美枝といった研究者と親交があり、そのやり取りの中で自分の表記法を確立していったからだろうと思われる。

しかし萱野は、これらの出版物ではtuをトゥで書き表していたが、1989年の平取町二風谷アイヌ語教室講義録『やさしいアイヌ語(1)』あたりから、ト°を用いるようになっていく。実は、1963年に公表した「クルコトナシのウエボタラ」でも本文中ではト°を用いているのであり、二風谷のアイヌ語教室でも一貫してtuはト°で書いてきたということであるから、これが萱野の本来の表記法であり、刊行物においてもその本来の自分の表記法に戻したということのようである。いわば、この時点で和人研究者のくびきから外れるようになったということであろうか。(資料5参照)

その後も1996年の『萱野茂のアイヌ語辞典』、1998年の『萱野茂のアイヌ神話集成』、2005年の『アイヌ・暮らしの民具』に至るまでtuはト°で表記しており、2005年に日本伝統文化振興財団から新訂復刻された『ウエペケレ集大成』*16では、74年版で大文字で表記されていた-rなどを小文字に直す他に、トゥで表記されていたtuをすべてト°に改めている。それ以外にも、『ウエペケレ集大成』(74年版)の時点では-iwを含むniwkes「嫌がる」のような語はニウケシのように表わされていた(シの大小を除いては緑本も同じ表記)のが、96年の『アイヌ語辞典』で

*16 1974年版とは、書名の表記自体が違うものになっている。

はニューケシのように表記されるようになっている*¹⁷。このような流れによって、結果的に緑本の表記法はその元になっているはずの萱野の表記法とは少し違うものになることになった。

以上のようなアイヌ人自身のカナ表記による表現活動を見てわかるのは、それらが知里真志保も含めたアイヌ語研究者のカナ表記に対する様々な工夫とは、そもそも別の流れ、別の基準で作り上げられてきたものだということである。彼らにとってそれらはローマ字表記の代替物や補完物ではなく、それだけで理解し使用されなければならないものである。言うなれば、彼らが日本語話者として日本語を表記するために学ばせられた文字であるカナを、母語であるアイヌ語を表現するための唯一の手段として利用せざるを得ない状況で、それぞれが工夫し開発してきた表記法であるというところに、研究者のカナ表記に求める機能とは本質的に違うものがあると見ることができるではなかろうか。

⑤『アコロ イタッ』

それらの流れが、研究者の表記法と暫定的にせよすり合わせられたのが、アイヌ人の最大の組織である北海道ウタリ協会が 1994 年に刊行したアイヌ語教科書、『アコロ イタッ』の編集の場においてである。そこには、ウタリ協会の秋辺得平を編集委員長として、片山龍峯、岡田路明、切替英雄、米田(本田)優子、佐藤知己、奥田統己、筆者などのアイヌ語関連の研究者と、全道 11 ヶ所(当時)のアイヌ語教室の代表者が集まった。この編集会議においては、ローマ字表記とカナ表記のそれぞれについて、これまでに使用されている様々な表記法について研究者側が紹介を行い、それぞれの長所・短所について説明を行った上で、アイヌ語教室の代表者がどういう表記法を採用するかについて討論を行った。結果的に採用されたものは、ローマ字表記、カナ表記とも前述の緑本の表記法にかなり近いものとなった。言い換えればカナ表記に関しては、『ウエペケレ集大成』(1974 年版)当時の萱野茂の著作の表記法に近いものとなったと言ってもよい。萱野の著作等によって、すでにこうした表記に慣れ親しんでいた人が多かったということも、この表記が採用される理由のひとつになっていたのではないかと思われる。

*¹⁷ ただし、ciw「刺す」は『ウエペケレ集大成』でもチューのように書かれているので、これもまた、それが萱野自身の本来の表記法であったようである。

表 8 : 『アコロ イタッ』 のカナ表記法

	音節頭	音節末
音素	カナ表記	カナ表記
p	パ行	ッ (小)
t	タ行	ッ (小)
k	カ行	ク (小)
c	チャ行	
m	マ行	ム (小)、ただし p,m の前では ン (大)
n	ナ行	ン (大)
s	サ行	シ (小)
h	ハ行	
r	ラ行	ラ、リ、ル、レ、ロ (小) (原則として) 前音節の母音に 従って
w	ワ行	ウ (大)
y	ヤ行	イ (大)
tu	トウ	
ye	イエ	
wi		
we	ウェ	
wo	ウォ	
-pp-, -tt-, -kk-, -ss-などの-C はッ (小) で表わす。		

ただし、この表記法が緑本等と異なるのは、-s および-r の扱いである。-s に関しては、緑本では「語末の s は原則として小さな^シで表わします。ただし、スに近く聞こえた時は、小さな^スで表すこともあります」(1988: 4) としているが、『アコロ イタク』では小文字^シに統一されている。また-r に関しては、緑本では「語末の r は、そのときに実際にどう聞こえたかによって、小さな^ラ、^リ、^ル、^レ、^ロで表します。一般にはその直前の母音と同じ母音の^ラ行音、たとえば *pirka* だったら^ピと同じ母音の^リに近く聞こえますので、^ピリカという表記になるのが普通です」(同上) となっているが、『アコロ イタク』では「r は直前の母音(ア、イ、ウ、エ、オ)の音色にしたがって、^ラ、^リ、^ル、^レ、^ロにひびくので、原則としてそのように表記しました」(4) となっている。同じようなことを言っているようだが、前者はそのときの聞こえ方によって同じ単語でも表記が変わることを認めているのに対し、後者は「原則として」というただし書き付きながら、同じ単語は常に一定の表記で書くということを示しているのであり、違いは大きい。

このような方針の立て方は、ここでの検討の主眼が表記の「統一」ということにあったこと、各地のアイヌ語教室のおかれている状況が様々であり、自分たちの方言の資料を『方言辞典』などの文献に頼らざるを得ない地域が少なくないこと等によるものである。「聞こえたとおりに」というのは、それを母語として発音できる話者がいる環境や、録音資料を聞き起こす場合に限って可能なものであり、文字資料を活用しようとする場合には、それらを一定の方式で転記できるようになっていなければならない。辞書の作成と言うことを考えた場合にも、同じ語は常に同じ表記で書かれるようにしたほうが便利である。そうしたことが音声の細かい違いを表記することより、むしろそれに左右されない表記法を選択することになった理由である。

『アコロ イタク』自体は、1994 年に 1 が出ただけで、その続編は現在にいたるまで計画もされていないようであるが、その影響は大きく、これ以降この表記法に準じてカナ表記が行なわれた刊行物が数多く出ている。たとえば、アイヌ民族博物館で刊行されている「伝承記録」シリーズでは、「現在刊行されている辞典類やアイヌ語テキストを併用する際の便を考え、カタカナ表記は、『アコロ イタク AKOR ITAK [アイヌ語テキスト 1]』(北海道ウタリ協会, 1994 年)の表記法にならった」(アイヌ民族博物館 1999: ix) のように記されている。

また、1995-6 年に相次いで刊行された辞書類のうち、田村すず子(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』にはカナ表記を『アコロ イタク』に従う旨が明記されているし、中川裕(1995)『アイヌ語千歳方言辞典』でも、同書への言及は無いが、実質的に同

じ表記法である。萱野茂(1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』は、言うまでもなく、ト°を採用している点などを除けば、ほぼ同じ表記法である。また1997年から萱野志郎が発行責任者となって、二風谷から刊行しているアイヌ語による季刊誌『アイヌタイムズ』(アイヌ語ペンクラブ刊)も、カナ・ローマ字とも表記は『アコロ イタッ』に合わせているようである。

この表記法に対しては、音韻表記として不十分であるとか、音声実質から離れているといった批判も多く聞かれるが、研究者とアイヌ語教育に携わろうとするアイヌ人自身の熱のこもった議論の末に選択されたものであり、その意図するところを踏まえて、この表記法の意義を十分に考えなければならないであろう。

5 まとめ

最初の設問に立ち戻り、「アイヌ語には固有の・独自の文字があるか」および、「アイヌ語では、手紙でコミュニケーションをしたり、小説を書いたりすることが行われているのか」という問題についての解答をあらためて考えてみる。

アイヌ語には現在のところ、正書法として確立した表記法があるとは言えない。しかし、『アコロ イタッ』のように、それに向かって努力がなされてきたことは事実である。音節末子音を表記するのにカナの小文字を用いる習慣などはほぼ確立しているといってよく、フランス語のセディーユやアクサンの存在をもって、フランス語には英語とは異なる独自の文字があると主張するのであれば、このカナ文字の用法は日本語とは異なるアイヌ語独自の用法であり、アイヌ語には独自の文字があると言ってよい。

それを主張するのには、tu に対してトゥを使うよりもト°(あるいはツ°)を使うほうがよいということは、これまでも度々議論されてきた。ト°等を支持する理由としては、

- 1) 江戸時代から存在している表記法である
 - 2) 他の ta や te などと同じ資格の音節であるから1音節1文字のほうが望ましい
 - 3) 日本語にない発音であるということを文字の上から明確に表示できる
- などという意見が挙げられている。

一方、トゥを支持する理由としては、萩中(1973)が述べているように、日本語における慣用的表記法として定着しているということが挙げられるが、アイヌ語表記の現場に即して言えば、アイヌ語母語話者としてカナ表記でのテキストを多数公表

している萱野茂がト°をおもに使用しているだけでなく、これまで見てきたように、アイヌ語母語話者の多くは慣用としてト°、ツ°表記をおもに使ってきているのである。またトゥと書いてあってもそれを tu と読むとは限らないということも、学習の現場では事実として存在する。結局正しい発音は文字の工夫によるのではなく、耳から覚えるようにしなければならないのであり、日本語にもともと無い発音を日本語の慣習的表記で表現しようとするのは、無理なのだとも言える。

筆者自身を含めて研究者がトゥを採用してきた大きな理由は、1) ワープロなどで打ちにくい。特に縦書きで表示するのは困難である。2) 活字にした場合は作字しなければならず、余分な費用がかかる、等のきわめて実務的な問題であると言ってもよい。しかしト°等はすでに JIS 第三、第四基準でコード化されていることもあり、ワープロ等で自由にこの文字が使えるようになった場合は、ト°で表記することを妨げる理由はほとんど無いであろう。

ただし、同じ理屈でいえばチャ、チュ、チョ、イエ、ウィ、ウェ、ウォなどもまた 1 文字で表されるべきだということになり、事実、アイヌ語母語話者の書き手はそこに工夫を重ねてきた。しかし、それを実行すれば今度は日本語を書き表す際のカナ表記の慣用からどんどん遠ざかってしまい、大多数の日本語を母語とするアイヌ語学習者にとって使いづらいものになることも否定できない。

さて、現在アイヌ語のテキストはカナ表記とローマ字表記の双方で、盛んに公刊されている。執筆者の中にはアイヌ人としての出自を持つ研究者も少なからずいるし、またアイヌ文化振興・研究推進機構の出版助成などを使って、アイヌ語のテキストを公開しようとする、専門の研究者ではないアイヌの人々も出てきている。

しかし、コミュニケーション手段や、自分の考えたことを表現するための手段として、どれだけ文字が活用されているかということになると、まだそれが慣習として確立できていると言えるような状況にはない。アイヌ語による定期刊行物としては前述の『アイヌタイムズ』という冊子がある。これは、おもに伝承文学ではない現代のニュースなどをアイヌ語で表現しようとしたものだが、こうした運動がもっと活発に展開されれば、アイヌ語には文字があるということを声高に主張できるであろう。

アイヌ語学習者の数は、わずかずつではあるが年々増加してきている。現在のところそれは記録されたものを暗誦するということに、まだ大きな比重があると考えられるが、インターネットなどを舞台に、アイヌ語によるチャット、作文、創作などといったものが行われるようなことになれば、アイヌ語の文字文化が発展することは、現在の状況をみても決して夢想ではない。そうした活動の中で、多くの人

の手によってより適切な表記法が確立していくということが、最も望まれることである。

本稿ではカナ表記を中心に記述してきたが、将来において彼らの正書法としてカナが採用されるかローマ字が採用されるかは、まだ定まったことではない。それはこれからアイヌ人自身のアイヌ語の使用の中で決まっていくことであろう。『アコロ イタッ』で結局二重表記が採用されているのも、そうした判断によるものである。ただ、そろそろ自然収束にまかせるばかりでなく、表記の統一や新語の制定などを検討するアカデミーのようなものが、アイヌ人の組織として生まれることも必要な時期に入ってきているのではないかとも思われる。公の場で多くの人が議論を戦わせることで、アイヌ語そのものに活力が与えられるようになることを、今後の展開として期待したい。

参考文献

- アイヌ民族博物館編 (1999) 『川上まつ子の伝承—植物編 1—』 (アイヌ民族博物館 伝承記録 4) 荻原眞子解説、丹菊逸治翻刻・訳注 (2001) 「千徳太郎治のビウス ツキ宛書簡—「ニシバ」へのキリル文字の手紙—」 『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』 第 4 号 千葉大学ユーラシア言語文化論講座
- 萱野茂 (1963) 「クルコトナシのウエボタラ」 『アイヌ文化』 2 号
- (1974) 『ウエペケレ集大成』 アルドオ : (2005) 新訂復刻 『ウエペケレ 集大成』 日本伝統文化振興財団
- (1976) 『チセ・ア・カラ』 未来社
- (1979) 『ひとつぶのサッチボロ』 平凡社
- (1988) 『カムイユカラと昔話』 小学館
- (1989) 『やさしいアイヌ語 (1)』 平取町二風谷アイヌ語教室
- (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』 三省堂
- (1998) 『萱野茂のアイヌ神話集成』 ビクター
- (2005) 『アイヌ・暮らしの民具』 クレオ
- 金成まつ筆録 金田一京助訳註 (1959—1970) 『ユーカーラ集』 I—IX 三省堂
- 金田一京助 (1923) 『アイヌ聖典』 世界文庫刊行会
- 金田一京助・知里真志保 (1936) 『アイヌ語法概説』 : (1974) 『知里真志保著作集』 4 平凡社所収
- 切替英雄 (1997) 「アイヌによるアイヌ語表記」 『国文学解釈と鑑賞』 1997 年 1 月号
- 釧路アイヌ文化懇話会編 (1998) 『アイヌ・モシリ』
- 葛野辰次郎 (1978-91) 『キムスポ』 全 5 冊 : 合冊本 (1999) 私家版
- 久保寺逸彦 (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿』 北海道教育委員会
- 札幌テレビ放送 (1978) 『サコロベの世界』
- 砂沢クラ (1983) 『私の一代の思い出 クスクツァ オルシベ』 みやま書房
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館
- 田村すず子編 (2001-2003) 『アイヌ語沙流方言の音声資料』 1-3 (文部省特定領域研究 (A) 「環太平洋の消滅の危機に瀕した『言語』にかんする緊急調査研究」 ELPR
- 知里真志保 (1942) 『アイヌ語法研究』 : (1973) 『知里真志保著作集』 3 所収
- (1953) 知里真志保 『分類アイヌ語辞典 植物篇・動物篇』 : (1976) 『知里真志保著作集』 別巻 1 (本文の参照ページ数は『著作集』による)
- (1954) 『分類アイヌ語辞典 人間篇』 : (1975) 『知里真志保著作集』 別巻 2

- (1956)『アイヌ語入門』楡書房：(1973)『知里真志保著作集』3所収
——(1986)『和人は舟を食う』北海道出版企画センター
知里幸恵(1923)『アイヌ神謡集』郷土研究社：(1978)岩波文庫
——(1984)『知里幸恵遺稿 銀の滴』草風館
中川裕(1995)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
永田方正(1891)『北海道蝦夷語地名解』：(1984)復刻版 草風館
鍋沢元蔵(1965)『アイヌ叙事詩 クト°ネシリカ』門別町郷土史研究会
——(1966)『アイヌの祈詞』門別町郷土史研究会
——(1969)『アイヌの叙事詩』門別町郷土史研究会
貫塩喜蔵(1978)『アイヌ叙事詩 サコロペ』白糠町
萩中美枝(1973)「アイヌ語のカナ表記についての試み」『北海道の文化』29
バッチャー八重子(1931)『若き同族に』竹柏会：(1974)復刻 北海道編集セン
ター：『若きウタリに』(2003)岩波現代文庫
服部四郎編(1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店
北海道ウタリ協会編(1994)『アコロ イタッ』
山本多助(1991)『イタッ カシカムイ』北海道大学図書刊行会
Refsing, Kirsten.(1986) *The Ainu Language*, Aarhus University Press
Сэнтоку, Тародзи (2000) Письма Брониславу Лилсудскому, *Известия ин-
ститута наследия Бронислава Пилсудского* 4, Южно-Сахалинск 2000:
89–97.

ネバタ フチエカシ
ne pa ta huci ekasi

チヅラ キタミ ユーベッツ エイネ
ci tura *Kitami* Yupet eine

バエアッシ
paye as.

クアニ ボンヅレシ クカイ ボロヅレシ
kuani pon turesi ku kay, poro turesi

テケ クアニ トットアナックネ
teke ku ani, totto anakne

ク アキ カイワ クルマ オシケ
ku aki kay wa *kuruma* oske

ウサ アマンム ウサ ボンエベレ フチ
usa amam usa pon eper, huci

エカシウタラ コロベカ クサ
ekasi utar korpe ka kusa

ワ バエアシ
wa paye as.

レウ克蘭 レトネワ
re ukuran re to ne wa

ユーベッツタ シレバ アッス
Yupet ta sirepa as.

クコロ ヅレシ イワンバ ネコロカ
ku kor turesi iwan pa ne korka

チキリ アラカワ バラバラック
cikiri arka wa paraparak,

その年、おばあさんおじいさんに
《母方の祖母、祖父》

つれられて 勇別へ
《湧別川》

行った。

私は小さい妹 おんぶして、大きい妹の

手ひいて 母は

弟おんぶして 手車の中へ

色々米やら 小さい子熊おばあさん

エカシ達の 物のせて
《おじいさん》

行った。³⁹⁾

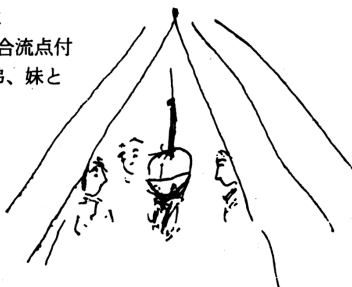
三晩 三日で

勇別に 着いた。

妹は 六歳に成ったが

足いたくて 泣きながら

40) 北見勇別の川原に
《湧別川と武利川の合流点付
近に小屋を作り、弟、妹と
留守番する》。



シンヌタウツカ ウン クウル コル ユウカル

ネコン イキワ シツオ ハウアンベ アンネヘキワ。
 どう なされて 生き ながらえた者 私なのか。

タバン シボロ チヤシ オシケ オロタ チヤイコ バシテ
 この 大きな 家の 中 所 自分自身で 解り

ネヒネヤツカ ネン シネン イキア ヤツカ、 チコルロツ チセ
 ましたけれど だれ 一人で あれ ども 我的 家

オレン エッ シイリ ボカ コアラリ イサウム。
 へ 来る 事 も 全然 ございません

ウミシム スクウツ アンキカネ ツケシト オロタ レケシト
 淋しい 暮し 致しながら 二日 たてど 三日

ネヒネヤツカ。
 なれども

資料3 葛野辰次郎(1979)『キムスポ2』:3

イシカラブトウタアナン シリマオツテ アネヒネアナニケ エアシリカ スンケイレнка
 イツカイレンカ アエモシリウエンテ アエコタンウウエンテコロ ナーエケシンネアブ
 カシアンコロパテッ アナソルウエネヒケ エアシリイヌアナウエネアニ イシカラエムコ
 コアスルアシ イワンイリワツネ オツカイボウタラ ニシバネアスル パウエトツコロアス
 ル ラメトツコロアスル カムイアスルネ チホブンパレコロシランベネヒケ ネイタカエウ
 ソアラパアンワスイ スンケイレнка イツカイレンカアキワ ネブボカアコウイナクニ ア
 エミナルスイコロ アナンベネヤヒクス シネアンタスイ ラリユーヒーネアラパアン アイ
 ネウライウシタアラパアン ウライウシウンクル アスルアシクルネヒケ オロタヘノイエア
 ソワ シニアンワカアラパアンシコロ ヤイヌアニクス ウライウシウンクル コロペタルオ

235 パラコアッ (罰当たり) シリマオツテ

資料4 萱野茂 (1979) 『ひとつぶのサッチボロ』より「パラコアッ (罰当たり) シリマオツテ」: 235

インカ^ックス、シリコ[。]カムイ、アイヌモシリ、モシリソクルカ、
 アオランケピト、ペロカムイ、シリコ[。]カムイ、エネワタッタ、タ
 パンヌタッソ、キムンヌタッソ、ヌタッソクルカ、エア^ッチクニ、エ
 ネルウエネ、キワネアワ、タパンペネノ、イケ^ッケピト、イヌン
 チリカムイ、ア^ッウエンカムイ、タパンペネノ、スク^ッマツカチ、
 アイヌマツカチ、エナンエトコ、エウエンテカド、パロ[。]カ^ッケ、
 エウエンテカド、イキワネヤ^ッネ、シリコ[。]カムイ、カムイカツケマツ、
 ヌブ^ックスリ、ヌブ^ッタクサ、タクサド[。]ラ、スク^ッマツカチ、エキ
 ムイカシ、エエピ^ッワ、ネワネヤ^ッネ、エネヤンクニ、アイヌアナ